

荒城の月

文語解説および英語散文譯

高田 友

残暑御見舞申し上げ候。皆々様、恙無く過され候段、祝著至極に御座候。オリンピック・パラリンピックも大過ありといへども漸く終著點に達し候て、コロナの下に平穩ならぬ平穩の日々を取り戻し候條、慶賀仕るべく候矣。

八月二十三日は「處暑」、二十四節氣の第十四にて、「立秋」と「白露」の間に有之候。「處」は「とどまる」にして、「暑さとどまるの時」の義なりと説く人多く候へど、「暑處」ならで、「處暑」なる上は、「處」は「とどまる」にあらで、「とどむ」に候はずやと愚考仕り候。然則「暑さをとどむるの時」と訓み候ふべく存知候。いづれならんとも、初涼訪るるの候を申し候ふ儀に候はん。

扱、舊曆八月の望月は「中秋の名月」もしくは「仲秋の名月」にて候。「中秋」は八月十五日、「仲秋」は八月の謂ひにて候へば、畢竟詰る所は一に歸して候。

片や、新曆八月の望月を、米國については sturgeon moon と申し候。sturgeon は「蝶鮫」(キャビアの親)。五大湖周邊の native Americans の蝶鮫漁、此れが満月の頃ほひに最盛期を迎へ候に據りて、斯くは呼ばれて候。而して、今年の sturgeon moon は八月二十二日。夏の満月は大略冬の太陽の軌跡を辿り候へば、南中高度甚だ低きによりて、我が部屋の向ひなる建物の蔭に隠れ候はんやと懸念いたし候へども、辛うじてその上部を通過し、見事、望月を堪能するの機會に恵まれて候。

なほ、今年の中秋の名月は九月二十一日との由。各位に於せられては、お見逃しなきやう。

さて、此度は名月に觸發せられ候て、名曲「荒城の月」の解説を試みて候。

「荒城の月」は明治三十四年発表。作詞は土井晩翠、作曲は瀧廉太郎。文部省の中學校唱歌として懸賞募集したるに、東京帝國大學大學院生の土井晩翠（三十一歳）應募して當選。これに東京音樂學校の瀧廉太郎（二十三歳）すなはち曲を附けたる作品なり。

晩翠の腦裏にありし荒城は仙臺青葉城および會津若松城と推定せられ、また、廉太郎の思ひありしは富山城もしくは豊後岡城（竹田城）なりとぞ傳へらるる。（會津若松城は、明治七年廢城令によりて破却せられ、戦後漸く再建せられたれば、晩翠の見たる城は眞の荒城なりき）

全四聯の歌詞を紹介し、これを文語散文にて解説し、かつまた拙き英語散文譯を併せたり。

お笑ひ棄てあらせらるべく。

インタネットにて歌曲を聞かれんと思し召す各位には、「三橋美智也」もしくはは「舟木一夫」を推奨仕る。

一

春高樓の花の宴

めぐる盃影さして

千代の松枝分け出でし

昔の光今いづこ

春、もののふは櫻の下に宴を催す。

天守に集ひて、盃を交せば、酒の面に光あり、

三五の月、老樹の彼方より現はれたり。

ああ、美しき抒情の詩、いづくにか去りて、

なんぞ我儕は見るを得ざる。

In the spring, the warriors used to hold a party,
Getting together on the lofty terrace.

They exchanged cups of rice wine.

A full moon appeared from among aged pine branches.

How come that graceful lyrical view can't be seen now?

二

秋陣營の霜の色

鳴き行く雁の數見せて

植うる劔つるぎに照りそひし

昔の光今いづこ

秋、もののふの戦ひに備ふるに、月光さやかなり。

鳴きつつ飛び來たる初雁の幾羽なるを知るに足る。

切っ先を地に埋めたる抜き身の劔、數多あまたありて月光これを照らす

ああ、勇壯なる敘事うたの詩、今いづくにかありて、

なんぞ我儕は見るを得ぞらぬ。

In the autumn, they prepared for the battle.

The moonlight was bright enough

To count how many wild geese were flying away, crying lonely.

And it shone on the swords, whose sharp ends were buried in the ground.

How come that gallant epical view can't be seen now?

三

今荒城の夜半よはの月

變らぬ光誰たがためぞ

垣に残るはただ葛かづら

松に歌ふはただ嵐

荒れ果てたる城の空、今夜半の月かかる。

さやけき光、ありし日に變るなし。

ああ美しきかな。見る者なきに、誰たが爲にか照れる。

石垣には蔓草の残れるのみ。

松枝まつがえを吹き抜くる松籟しょうさい、なんぞ斯くは悲しき。

Now the midnight moon is hanging above the ruined castle.

Its light is not different from what it used to be.

For whom is it shining so movingly on this desolate unmanned garden?

On the hedges remains nothing but climbers.

From the pine forest is heard only a stormy wind singing,

四

天上影は變らねど

榮枯は移る世の姿

映さんとしてか今もなほ

ああ、荒城の夜半の月

久方の天津御空、月は往時に變るなし。

されど、この儚き現世、

物として遷らざるはなし。

月の照れるはかかる閻浮提を映さんとなりや。

ああ、荒城の空の夜半の月かな。

In the heaven the moon still looks as it used to be.

But in this transient world,

All things are in flux.

Does it shine, intending to reflect the human society?

Oh, midnight moon above the ruined castle.

(令和三年八月二十四日受附)